

大豆「サチユタカA1号」の山間部用栽培指針

◎サチユタカA1号の適応地帯：サチユタカA1号はサチユタカと同様に10月下旬に成熟する中生で、県内肥沃地に適応する。サチユタカと同様に分枝が少なく、晩播適応性が小さいので、播き遅れないように注意する。難裂莢性であるが、極端に収穫が遅れた場合、品質が低下する恐れがあるため、適期収穫に努める。高品質安定生産のため、雑草防除、病害虫防除は必ず行う。

月	旬	主な生育段階及び作業	栽培管理のポイント
6	上	○ 施肥・耕起 ○ 種子消毒 ○ 播種 雑草防除	圃場の準備 ①排水溝の設置：圃場の排水状態に応じて、周囲に深めの排水溝を設けておく。 ②酸度矯正：耕起前にp H6.5を目標に苦土石灰を100kg程度施用する。 播種作業 ①施肥・耕起：耕起前に10a当たり窒素1～3kgを施用して、丁寧に整地する。 ②種子の準備：必要な種子の量は10a 当たり 5～6 kg。 ③種子消毒は必ず行う。 ④播種：栽植密度 10a当たり10,000～12,000株（条間：60～70cm、株間：10～15cm） ⑤雑草防除：播種後、土壌処理剤をむらのないように均一に散布する。
	中 下	(出芽期)	
7	上	中耕	中耕：雑草の発生を抑え、根張りを良好にするために、畝間を軽く耕耘する。 培土：雑草の発生を抑え、倒伏を防止するため、子葉節が隠れる程度の高さに培土する。 (病害虫防除)：カメムシ類の発生が多い場合には防除する。
	中 下	培土 [病害虫防除]	
8	上	△ △ [追肥] (開花期)	(追肥)：元肥を施用しない場合、生育状況を見て、必要に応じて速効性肥料で追肥を行う。 ※緩効性肥料の場合は培土作業の前に施用する。 病害虫防除：莢伸長期～子実肥大初期には害虫がつきやすいので、カメムシ類の防除をする とともに、紫斑病の防除も行う。
	中 下	病害虫防除	
9	上	病害虫防除	病害虫防除：子実肥大初期に、カメムシ類、マメシクイガ、シロイチモンジマダラメイガ 及び紫斑病の防除を行う。 ※ハスモンヨトウが発生した場合は、早めに防除を行う。 病害虫防除：9月上旬の防除で発生を抑えることができなかった場合など、さらに防除する。
	中 下	病害虫防除	
10	上	(黄葉期)	刈取：10月下旬～11月上旬、葉や葉柄が黄変して落ち、莢が褐変し、子実が硬くなって、 莢を降ると「カラカラ」という音がするようになった時が成熟期で、平年の場合は 10月下旬である。刈取適期は成熟期後、莢の水分が50～60%、葉の水分が20%以下 になった時期で、成熟期後7～10日で達する。大豆刈取機か人力による抜き取りを行 う。 <コンバイン収穫の場合> 莢の水分が50%以上であると汚粒が発生しやすいので、50%以下になり、莢を手で 折るとポキッと折れる状態になってから収穫する。成熟期後、14～20日で達する。十 分に乾燥させてから作業を行う。朝露のあるときや雨天時には脱粒・選別性能が低下 するほか、子実が汚れて品質も悪くなるので、作業はしない。
	中 下	(落葉期) ■ (成熟期)	
11	上	■ — 刈取 乾燥 調製	乾燥・調製：大豆刈取機・人力による抜き取りを行った場合は、地干し、島立て、架干しな どで予備乾燥した後、スレッシャーまたは動力脱穀機で脱穀する。脱穀時の水分が多 いと汚粒が発生するので、十分乾燥（水分17～18%）してから脱穀する。選別機で 選別し、唐箕にかけて、莢、葉、ゴミなどを除去する。水分15%になるように乾燥 する。
	中 下		